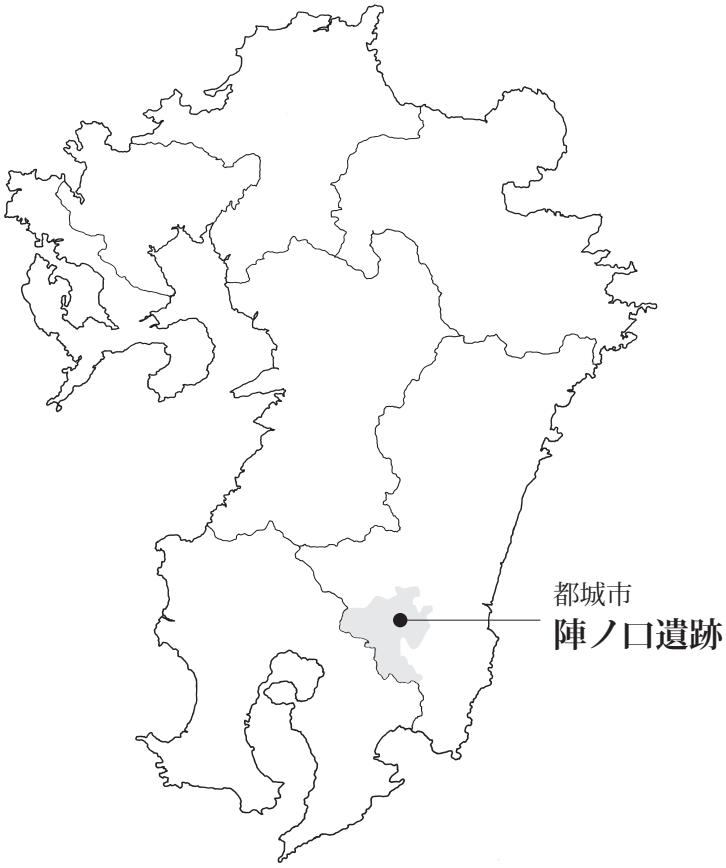
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第２２２集

都城市

陣（じん）ノ（の）口（くち）遺跡

県道高城山田線（志和池工区）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



２０１２

宮崎県埋蔵文化財センター

陣ノ口遺跡遠景（遺跡上空北東方向から志和池城、森田陣跡方面を望む）

波板状凹凸面遺構をもつ１号道路状遺構と並行する溝（南より）

２号道路状遺構断面（東より）

序

宮崎県教育委員会では、平成２３年度に県道高城山田線（志和池工区）道路改良工事に伴う発掘調査を行いました。本書はその報告書であります。

今回発掘調査を実施した陣ノ口遺跡は、都城盆地北部の上水流町に位置します。現在はのどかな田園地帯と台地が広がる地域でありますが、古く近世初期には南九州最大の合戦といわれる庄内の乱の舞台となった場所であります。一帯のランドマークである志和池城や、それをとりまく陣跡、戦にまつわる地名など、実際に歩いて歴史をたどることができる絶好のフィールドです。今回の調査では、中世以前に位置づけられる２条の道路状遺構を発見しました。謎につつまれた部分が大きいものの、今後この地の歴史をひもとくに際し、重要な要素となりえるものです。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた地域の方々、関係諸機関、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 10 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　北　郷　　泰　道

例　言

1　本書は、県道高城山田線（志和池工区）道路改良工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県都城市上水流町字陣ノ口に所在する陣ノ口遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、平成23年11月16日から12月26日まで行った。

3　発掘調査は、宗廣睦子（調査第二課調査第三担当　主事）・泊俊一郎（〃　主査）・木塲正浩（調査第一課調査第二担当　主査）が行った。また、現地調査における図面作成及び写真撮影については、前記以外に吉本正典（調査第二課調査第三担当　副主幹）が加わった。

4　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。本書に係わる業務は、遺物の実測、トレース、写真撮影については整理作業員の協力を得て宗廣が行った。

5　本書は、第Ⅰ章第１節を日髙広人が執筆し、それ以外の執筆と全体の編集は宗廣が行った。

6　調査区の掘削・排土移動及び復旧業務は、相葉建設株式会社に委託した。

7　自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託した。

8　本書で使用した地図は、国土地理院発行の二万五千分の一地形図（庄内）、五千分の一国土基本図（Ⅱ－ＯＥ－42）をもとに作成した。また、使用した方位は、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については、海抜絶対高を示す。

9　遺構の深さについては、全て検出面からの数値を、遺構の規模については、東西×南北にて表記している。

10　本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編2006『新版　標準土色帖』28版に準じた。

11　発掘調査では、周辺の聞き取り等に際し堀之内逸郎氏（県文化財保護指導委員）に、整理作業にあたっては、東　和幸氏、関　明恵氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）より御教示を得た。

12　調査で出土した遺物、その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第３節　整理作業の経過 …… 2
第４節　調査の組織 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地 …… 3
第２節　既往の調査と歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査区の基本層序 …… 6
第２節　中・近世～明治期 …… 6
　１　遺構の分布
　２　検出遺構と出土遺物
　　１）道路状遺構
　　２）遺構に伴わない出土遺物
　　３）その他
第３節　自然科学分析 …… 11
　１　概要と目的
　２　分析の方法
　３　分析の結果

第Ⅳ章　総括 …… 13

図　版　目　次

巻頭図版１
　遺跡上空北東方向より志和池城方面を望む
巻頭図版２
　上　波板状凹凸面遺構をもつ１号道路状遺構と並行する溝（南より）
　下　２号道路状遺構断面（東より）

図版１　上　陣ノ口遺跡空中写真
下左　土層堆積状況１　下右　土層堆積状況２
図版２　１　１号道路状遺構　上部硬化面と下部硬化面　５　２号道路状遺構　最硬化面
２　１号道路状遺構　断ち割り状況　６　２号道路状遺構　硬化面近景
３　１号道路状遺構と溝状遺構　７　２号道路状遺構　完掘状況
４　近世後期以降の溝状以降
図版３　上段　道路状遺構に伴う遺物（土師質土器、陶器、石器）
下段　近世～明治期の整地層から出土した遺物１（陶器）
図版４　近世～明治期の整地層から出土した遺物２（陶器、磁器、土製品）

挿　図　目　次

第１図　陣ノ口遺跡周辺遺跡分布図 …… 4
第２図　遺跡の周辺 …… 7
第３図　調査区と遺構分布図 …… 7
第４図　遺跡の基本層序 …… 7
第５図　１号道状遺構の平・断面図 …… 8
第６図　１号道状遺構の出土遺物実測図 …… 8
第７図　２号道路状遺構の平・断面図 …… 9
第８図　２号道路状遺構の出土遺物実測図 …… 9
第９図　東区整地層出土遺物実測図（１） …… 10
第10図　東区整地層出土遺物実測図（２） …… 11

表　目　次

表１　放射性炭素年代測定の方法 …… 12
表２　放射性炭素年代測定の結果 …… 12
表３　陣ノ口遺跡出土遺物観察表 …… 14

凡　例

陶磁器の各種所見については、次の表現方法をそれぞれ用いた。

- 陶器の施釉範囲　・・・・・　一点破線
- 磁器の釉はぎ　・・・・・　断面にケバ

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

県道46号線は、都城市高城町穂満坊から都城市山田町山田を結ぶ主要地方道である。このうち同路線を横断する都城市志和池地区では志和池小・中学校や高城高校への通学児童生徒をはじめとする歩行者・自転車や自動車の交通量が多い区間であるが、幅員が狭小なうえに歩道が未整備であるため交通安全上大変危険な状態となっていた。このため都城土木事務所では、交通の安全を確保するとともに交通の円滑化を図るため歩道設置も含めた拡幅改良工事を計画していた。

文化財課では工事区間の一部に周知の埋蔵文化財包蔵地である陣ノ口遺跡が含まれていたことから、平成22年度から同事務所と協議を行った。

平成23年１月26　日から27日、４月28日及び５月12日から16日の２回に分けて陣ノ口遺跡及びその隣接地の試掘・確認調査を実施した結果、中世の遺構や遺物等が出土し、遺跡のうち280㎡について埋蔵文化財が影響を受けると判断されたため、その取扱いについて協議を重ね、記録保存のための本発掘調査を実施することになった。

発掘調査は都城土木事務所事務所長の依頼を受けて、県埋蔵文化財センターが実施した。

第２節　調査の経過

調査以前、予定地には住宅が建っていたが、用地買収に伴って路線外に移築され、草の生い茂る空き地となっていた。文化財課では道路南側沿線を中心に確認調査を行い、調査時の東区、西区部分それぞれにおいて溝とみられる遺構が確認された。東区東部では明治期の遺物、同西部では中世の遺物が出土していた。東区、西区それぞれで確認された２条の溝状遺構はいずれも埋土に桜島由来の文明軽石（1471年）を含んでいたことから、近しい時期に属するものと想定された。以上のような試掘結果を受け、本調査では、東区、西区を調査の対象とすることとした。調査区は道路に面していることもあり、対象範囲の周囲には安全上ある程度のスペースを設けた。結果的に、実質的な調査面積は280㎡となった。

調査は11月16日より開始した。敷地の関係上、東区の東半部から着手し、残り西半部は一時的な排土置き場として使用した。重機による表土除去は、東区・西区いずれにおいても御池軽石を含む黒色土（後述、Ⅱa層）上面までを対象とした。17日には事務所等リースの建て込みに立ち会い、18日から現地で募集した発掘作業員を動員して人力による掘り下げに着手した。人力の掘削には、作業の目的に応じて山鍬・鋤簾・ねじり鎌・移植ごてを使用した。遺構検出時やその他必要に応じて、図面・写真による記録を残した。調査に係わる測量業務に際しては、当該区間の工事施工者である株式会社島田工業の設けたトラバー杭および世界測地系座標を借用した。遺物は、調査区内に任意の10m間隔グリッドを設け、層位別に取り上げた。12月７日、東区東半部の調査が全て終了したため、排土を東半部に復旧、西半部の表土を重機にて遺構面まで除去した。同日、西区北半部の側溝埋設工事に際し、工事立ち会い及び簡単な記録を行った。遺構・遺物は確認されなかった。この際、西区南半部の表土はぎもあわせて行った。東区・西区で遺構を検出した状態で、12月15日、現場の空中写真撮影を行った。現地では御池軽石が厚く堆積しているため、それ以下の調査は実施していない。調査を行った遺構面は１面である。調査に係わる全ての作業を終え、12月26日に調査区の埋め戻しと事務所等リース物品撤収の立ち会いを行った。調査では、コンテナ２箱分の遺物が出土した。

第３節　整理作業の経過

当センターに持ち帰った遺物は、水洗、注記、接合、実測の過程を経て整理した。作業は平成24年５月１日から、同６月30日まで実施した。遺物の実測では、器種および部位がわかるものを対象として、40点を図化した。

第４節　調査の組織

坂ノ口遺跡の発掘調査および整理作業・報告書作成は、下記の組織で実施した。

調査主体　宮崎県教育委員会
調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

平成２３年度　発掘調査

所長		森　隆茂
副所長		北郷　泰道
総務課長		坂上　恒俊
総務課担当リーダー	副主幹	長友　由美子
調査第二課長		永友　良典
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹	吉本　正典
調査第二課調査第三担当	主事	宗廣　睦子　（調査・整理担当）
調査第二課調査第三担当	主査	泊　俊一郎（調査担当）
調査第一課調査第二担当	主査	木塲　正浩　（調査担当）
（発掘作業員）		榎木信子　倉盛サチ子　茶木洋子　福留康子 古市ふぢ子　前田瑞枝　吉田順子
事業調整　文化財課	主査	日髙　広人

平成２４年度　整理作業

所長		北郷　泰道
副所長		佐々木真司
総務課長		坂上　恒俊
総務課副主幹総務担当リーダー	副主幹	高園　寿恵
調査第二課長		永友　良典
調査第二課調査第三担当リーダー	副主幹	吉本　正典
調査第二課調査第三担当	主事	宗廣　睦子（整理担当）
（整理作業員）		下村　茂
事業調整　文化財課	主査	堀田　孝博

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と環境

陣ノ口遺跡のある都城盆地は、九州東南部に位置する。現行の行政区分では都城市を中心に、三股町、高原町、鹿児島県曽於市にまたがり、南北 40 ㎞、東西 15 ㎞の楕円形を呈する。東には東岳、柳岳を主峰とする山地が北から南南西に続き、西は北から南に連なる瓶臺山、白鹿山の山地によって鹿児島県国分と隔てられる。都城盆地は、この二つの並走する地塁状の高まりに挟まれた地溝状の凹地を指す。盆地内は東縁山地と盆地底の二つに大きく分けられる。東縁山地は高く起伏に富み、谷密度と傾斜度が大きい。平坦面が発達した盆地底には、大淀川が東西の山地から流れ出す小河川を集約しながら東寄りを北流し、川沿いに発達した氾濫原が低地を形成している。東縁山地から流れ出す諸河川は山地の谷沿いに河岸段丘を残し、山地出口から西北西に向かって開析扇状地を生んだ。盆地北西隅から南西隅には高度 180 ～ 260 ｍのシラス台地が広がる。東流する諸河川によって断たれると同時に小規模な谷に刻まれて丘陵化が進み、台地面は消失の傾向にある。シラス台地の東側には一段低い成層シラス台地が広がる。成層シラスは、シラス堆積後の直後、河岸段丘や開析扇状地形成以前にこの地にできた湖に堆積し、ひと続きの平坦面を形成しているものを指す。シラス台地同様、諸河川に分断されてはいるが、谷による開析は少ない。平坦面を広く残し、北端から南端まで続く。陣ノ口遺跡が立地するのは、成層シラス台地縁辺部、標高 150 ｍほどの“志和池”とよばれる地域である。現上水流町の志和池城跡（後述）を中心に、下水流町、丸谷町一帯がそれにあたる。

第２節　既往の調査と歴史的環境

志和池において最古級に位置づけられるのは、隆帯文土器が出土した草創期の堂山遺跡である。下薗遺跡で偶発的に発見された押形文をもつ壺形土器は早期の中でも最古級に位置づけられ、この器種が弥生時代以降に定着するという従来の認識を再検討する契機となった。松ヶ迫遺跡ではバリエーション豊かな土器と石器、集石遺構や煙道付炉穴などの調理施設も見つかった。草創期段階から早期及び鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約 7,300 年前）噴火前までの遺跡は、丸谷川ぞいの狭い範囲でしか確認されていない。鬼界アカホヤ火山灰降下以降、前期から中期にあたる遺跡は、ほとんどないといっても過言ではないほど激減する。これは、南九州一帯に共通してみられる傾向である。中期から後期の間には霧島御池が噴火し、霧島御池軽石（Kr-M、約 4,600 年前）が降下した。現地ではボラとよばれ、陣ノ口遺跡の付近では少なくとも２ｍの堆積を確認した。後期になると、台地上一円で生活が営まれるようになる。十三束遺跡や本池遺跡では、弥生時代にかけての土坑群・石組み遺構と、土器、石器が出土した。築池遺跡では竪穴建物も見つかった。晩期になると、前時代に引き続き土掘り具が広く用いられ、扁平打製石斧の増加が顕著となる。前半期には条痕文土器、組織痕文土器、後半期には突帯文土器、朝鮮半島とのつながりを示す孔列文土器がある。屏風谷第１遺跡では、土坑から編布圧痕を伴う松添式の鉢形土器や精製土器、土掘り具が出土した。土器は前畑遺跡でも出土している。弥生時代中期ごろになると、より広範な地域の文物がみられるようになる。上大五郎遺跡では、黒髪式土器や下城式土器など、中九州に分布の主体をもつ土器が出土し、十三束遺跡では薩摩地方由来の入来Ⅱ式土器と、ミミズバレ状の突帯をもつ器壁の厚い甕が主体となる。本池遺跡では、在地色の強い宮崎平野部由来の中溝式と、分厚く粗雑な突帯が巡り、その下部に半円状の年度紐を付す南九州内陸の山間部由来の土器が見られる。後期には、平面プランが花びら状をなすいわゆる花弁状住居がみられるが、志和池を含む台地上において、古墳時代初頭段階まで同遺構が存続する傾向がみられる。後期後葉の丸谷第一遺跡ではベッド状遺構と屋内を伴う花弁状住居が見つかり、住居の上部構造とみられるクリやコナラ、シャシャンポの炭化

第１図　陣ノ口遺跡と周辺の遺跡位置図

材が見つかっている。丸谷第二遺跡では東九州の刻目突帯文系土器の中溝式土器や、大隅半島系の山ノ口式、薩摩半島系の一ノ宮式土器が出土し、東九州における中期土器の伝播を知る上で意義深い事例である。前畑遺跡で発見された後期後葉から古墳時代初頭にかけての集落では、方形・円形を基調とした花弁状住居が発見された。花弁状住居は平野部では後期後葉に姿を消すが、志和池を含む内陸部ではより新しい段階まで存続する傾向がある。前畑遺跡では方形花弁状住居は弥生土器、方形住居は古墳時代の土器を伴い、各時代のセット関係を如実に示す事例である。下大五郎遺跡では、市域でも類例の少ない独立棟持柱をもつ掘立柱建物が検出された。終末段階になると、山ノ田遺跡でみられるように広く間隔を設けて花弁状住居が配置されるようになる。古墳時代に入ると、初頭には住居の平面プランに方形が加わり、前半期にはそのほとんどが方形・大型化する。屏風谷第１遺跡で見つかった前期の住居は火山災害に遭ったとみられ、埋土に霧島御鉢

由来の高原スコリアが含まれる。後期は、前畑遺跡、山ノ田第１遺跡で包含層が確認されているのみである。なおこの頃、市域の竪穴建物においてカマドの導入が始まる。墓域は、丸谷川右岸の台地縁辺部に集中する傾向がある。築池遺跡に含まれる志和池古墳群は中期から後期にかけての前方後円墳１基、円墳８基、地下式１基があり、地下式横穴墓は古墳の周溝に寄生する形で造られている。築池地下式横穴墓群は、地下式が55 基、土坑墓４基をかかえ、多くは妻入り型で、平入り型がこれに加わる。2001 －１号地下式横穴墓は市域において最上級クラスの副葬品をそなえる。陣ノ口遺跡からさらに台地を下った所には、後期を主体とする平原地下式横穴墓群がある。丸谷川左岸での唯一の発見例である山ノ田遺跡の地下式横穴墓は小児用と考えられており、床面にベンガラを設けた小型の玄室をもつ。　律令期以降の事例では、本池遺跡の９世紀後半から 10 世紀前半に属す掘立柱建物群があり、出土したまじないの符号をもつ墨書土器からは当時の精神活動の一端が垣間みえる。

さて、志和池は、永享四（1432）年七月十三日付の樺山孝久書状に初めてその名がみえる。名称の由来として、志和池裏手にある蓮池（児玉池）を見た雲林寺の僧侶が“志の和ぐこと、この池のごとくあれ”と言ったためという説話が残る。中世から近世にかけては、都城島津家編纂の『庄内地理誌』をはじめとする史料との照合によって、追認・位置づけがしやすくなるが、中でも志和池一帯は、台地の縁辺部を中心とした広大なフィールドに城館や大規模な陣跡が軒を連ねる稀有な例である。志和池の中核となる志和池城と野々美谷城は居城として機能し、戦乱に巻き込まれながら諸氏族の手にわたった。南九州最大の戦乱である庄内の乱（1599 年）では、島津氏とその分家である伊集院氏との激戦の舞台となった。伊集院氏の籠城する志和池城と野々美谷城との間を裂くように森田陣が築かれ、志和池城の背後と、陣ノ口遺跡にほど近い現在の科長神社方面までが大小の陣で包囲された。上大五郎遺跡で見つかった館跡は、『庄内～』中の同遺跡の川向かいに記された「丸谷某屋敷跡」に酷似する構造と規模をもち、14 世紀から 15 世紀後半の所産である。このような館は、他にも野々美谷城そばの児玉屋敷跡や、岩満町の岩満屋敷跡が『庄内～』に記されている。

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　発掘調査区の層序（第４図）

調査地は住宅を用地外に移設した経緯などもあり、広い範囲が造成に伴う撹乱を受けていた。このうち、比較的残存状態が良好な東区南壁西隅部分を基本層序として抜粋した。最上層には、木くずや粘土状のブロックを含む造成土があり（Ⅰ層)、それ以下は御池軽石を含む黒色土が堆積している（Ⅱａ～Ⅲ層)。遺構は、御池軽石層（Ⅳ層）ほぼ直上で検出した。Ⅱａ層上では、掘り込み内に灰色の火山灰が堆積した部分が見られ、同様の火山灰が上の造成土内にも散見された。桜島文明軽石が後述する道路状遺構内に堆積し、その後に黒色土が堆積していることから、また別の火山灰であると考えられる。なお西区については、表土を除去するとすぐに御池軽石層が現れ、かつごく狭い試掘溝内を占領するかたちで溝状遺構が検出されたため、土層の記録は行わなかった。

第２節　中・近世～明治期

１　遺構の分布

遺構検出面は御池軽石層（Ⅴ層）上面である。検出した遺構は全て、御池軽石層に掘り込まれている。東区と西区のそれぞれにおいて各１条ずつ、道路状遺構を検出した（第３図)。

２　検出遺構と出土遺物

１）道路状遺構

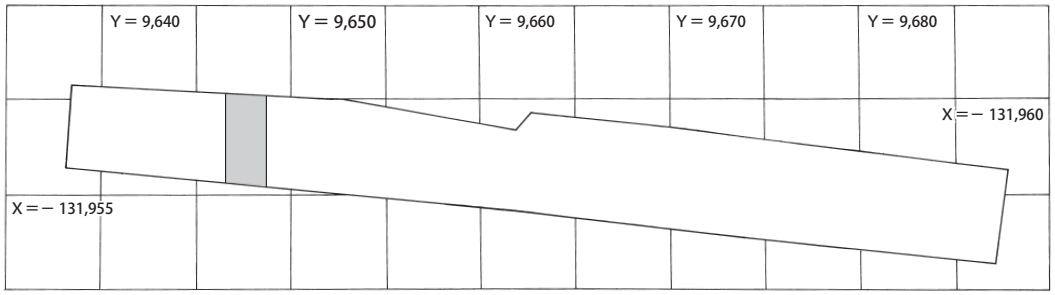
１号道路状遺構（第５図）

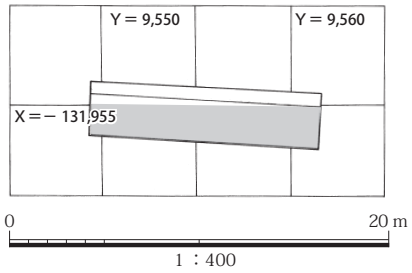
ほぼ南北、調査区に直交するかたちで検出した。東隣には溝状遺構が並行する。顕著な硬化面が２ヶ所認められ、その間は比較的軟質な黒色土が満たす。硬化層には水分にさらされたためか、赤化が認められる。下位の硬化面では連続する〇状のくぼみが検出され、これはいわゆる波板状凹凸面であると考えられる。くぼみとくぼみの芯心距離は平均で約 45 ㎝ほどである。牛馬の歩幅が 70 ～ 80 ㎝ほどであることをふまえると、さらに歩幅の小さな生物の所産であると考えられる。上位の硬化面には凹凸面は認められず、平滑であった。この硬化面上に黒色土がわずかに堆積した段階に、桜島文明軽石が降下している。並行する溝状遺構は、一時は道路状遺構と併存していたようであるが、波板状凹凸面が完全に埋没してしまうのと同時期に廃絶したものとみられる。文明軽石降下後に堆積した黒色土、１層から１の土師質土器が出土した。坏あるいは皿の底部片で、残存する体部には乱雑なナデ調整が認められる。

２号道路状遺構（第７図）

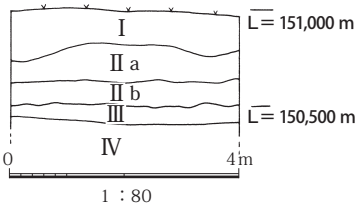
東西約12ｍの調査区にほぼ平行する形で検出した。調査区が民家に隣接していたため、遺構の全形をとらえられたのは調査区の東端部分のみであり、この部分における遺構の幅は3.6ｍである。検出面からの深さは、観察用畔部分で２ｍ～2.25ｍである。断面形はＶ字形を呈し、御池軽石と黒色土がミックスされながら埋没と硬化を繰り返し、パイ状に積み重なって厚さ70㎝ほどの硬化層を形成している。硬化層には部分的に赤化している層が見られる。堆積した硬化層を掘り下げていくと、掘り具の歯が立たないほどの硬化面を検出した（図版２－右上）。１号道路状遺構のような波板状凹凸面はもたず、硬化部の中央が膨らみ、片側が凹むような形状を呈する。全体的に、均整のとれた形状とはいえない。道路面の機能が停止すると、わずかな黒色土を挟んで文明軽石が降下し、黒色土によって検出面までが満たされたとみられる。道路状遺構に伴う遺物は、硬化

第４図　調査地周辺図





第３図　調査区と遺構分布図
上段：東区
下段：西区



第４図　調査の基本層序

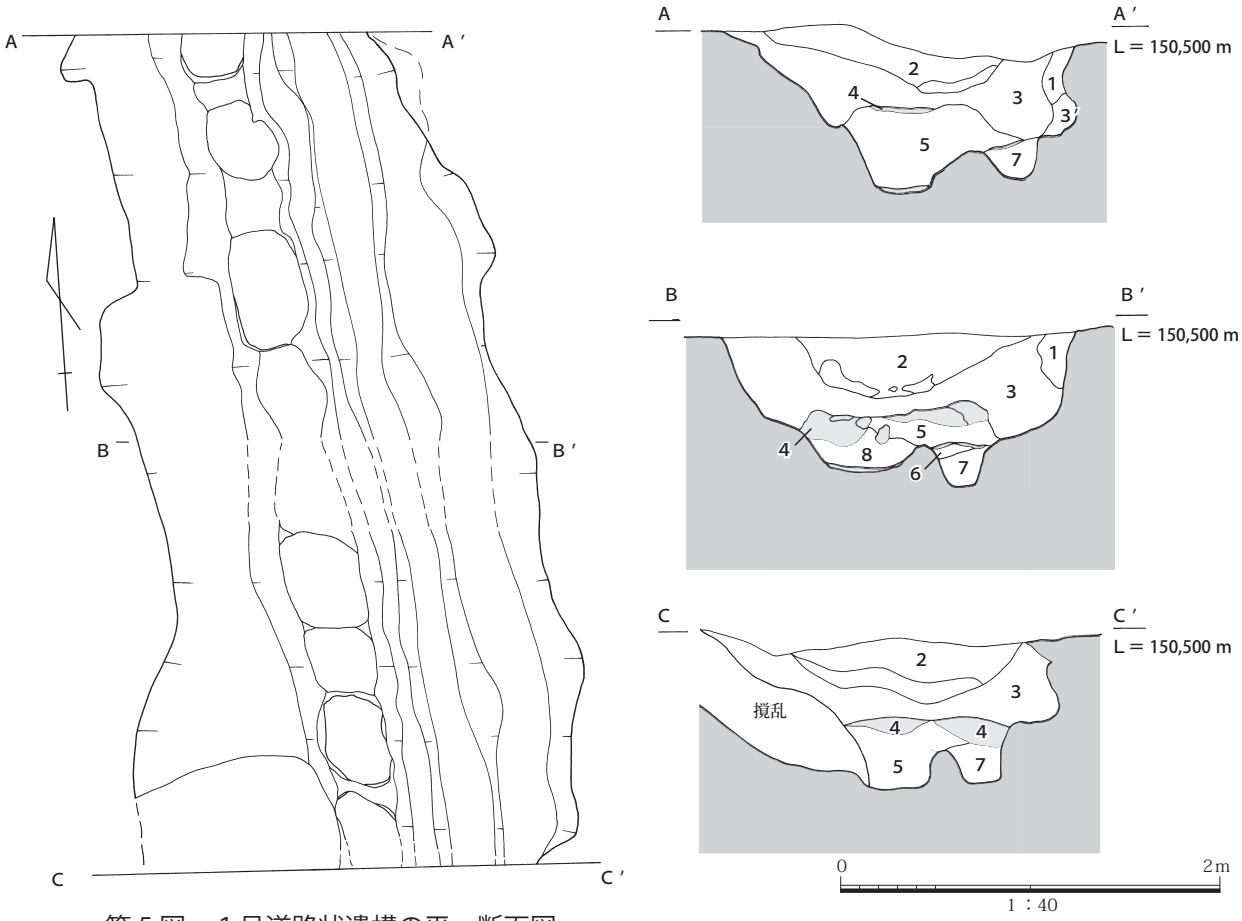
Ⅰ　層　黒褐色土（5YR2/1）。しまりなし。木くずや粘土状のブロックを含む。造成土か。

Ⅱａ層　黒色土（10YR1.7/1）。御池軽石を少量含み、粘性・しまりがややある。

Ⅱｂ層　黒色土（10YR1.7/1）。御池軽石を多量含み、粘性・しまりがややある。

Ⅲ　層　黒褐色土（10YR3/1）。御池軽石を多量に含む。粘性・しまりがわずかにある。

Ⅳ　層　御池軽石層。調査区一帯では、２ｍ以上堆積している。



第５図　１号道路状遺構の平・断面図

面上から出土した２と20㎝長の軽石塊がある。３～６は文明軽石降下ののちに流入したものであり、７は調査区における表採資料である。２の石器は凝灰岩製で、平面は円盤状、断面はレンズ状を呈する。３は薩摩焼龍門司系の碗、４は唐津内山系の碗、５、６は薩摩焼苗代川系の甕である。７は土師質土器で、底部はイトキリ技法が施され、底部縁は著しく波打つ。

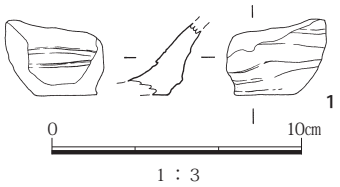
２）遺構に伴わない出土遺物（第９、10 図）

東区では、遺構検出面に至るまでの表土掘削過程で、近世から近・現代までの遺物を含む整地層を確認した。東区東半部においてのみ人力による掘り下げと精査を行い、遺物を回収したが、西区西半部部分に関する本格的な調査は実施しなかった。なお、西区ではこのような層は認められなかった。

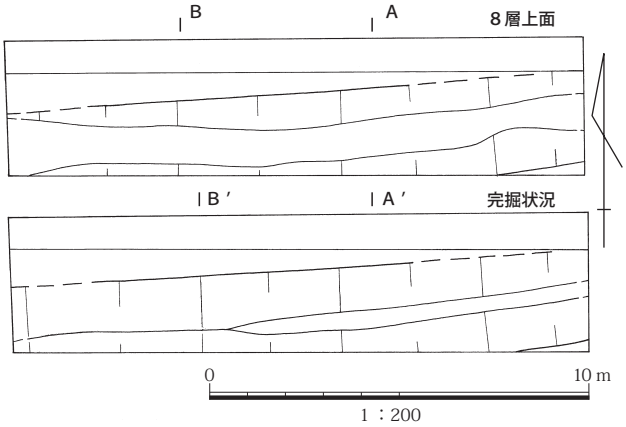
８は肥前系陶器の初期伊万里で、内面に胎土目が残り、高台内には“二〇”の墨書きが認められる（図版３）。薩摩系陶器には９～ 16、19、20、23、24、26、27 がある。15 は龍門司系、それ以外は苗代川系である。

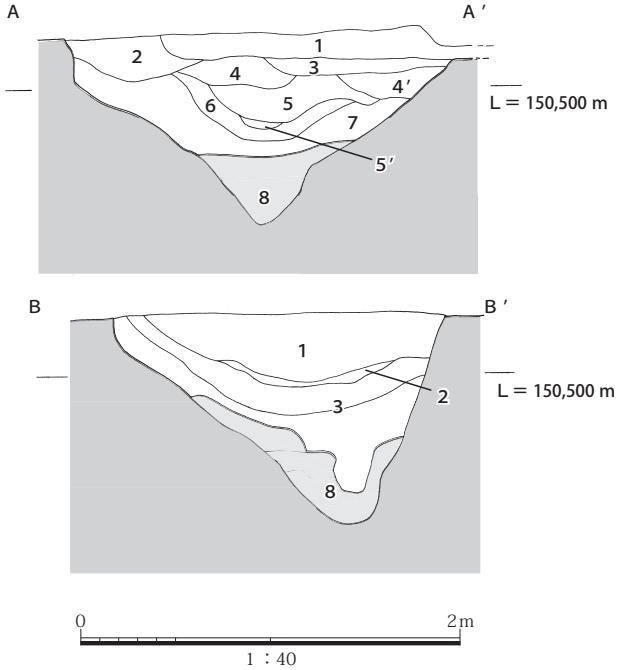
15 は瓶で、透明釉の白流である。16、19 は土瓶で、19 は外

1　黒（7.5YR1.7/1）色、しまり・粘性ともになし。御池軽石多く含む。
2　褐灰（10YR4/1）色、しまりなし、粘性わずかにあり。下部に文明軽石堆積。
3　黒（7.5YR4/1）色、シルト質で粒状。御池軽石パミスを少量含む。しまり・粘性ともなし。
3'　３－①層より御池軽石パミス含有率が高い。粒状を呈ししまりがなく、ぽろぽろ崩れる。
4　硬化土。御池軽石ブロックを主体とし、黒色土がわずかに混入する。上面のみ硬化している箇所もある。
5　黒（7.5Y2/1）色、御池軽石パミスを多く含む。粒状でしまりがある。下部は硬くしまる。
6　御池軽石パミスを大量に含み、上面は硬化している。
7　御池軽石を含まない点以外は５層と同質。黒（10YR1.7/1）色。
8　しまり・粘性ともにない黒（10YR2/1）色土、御池軽石を少量含む。



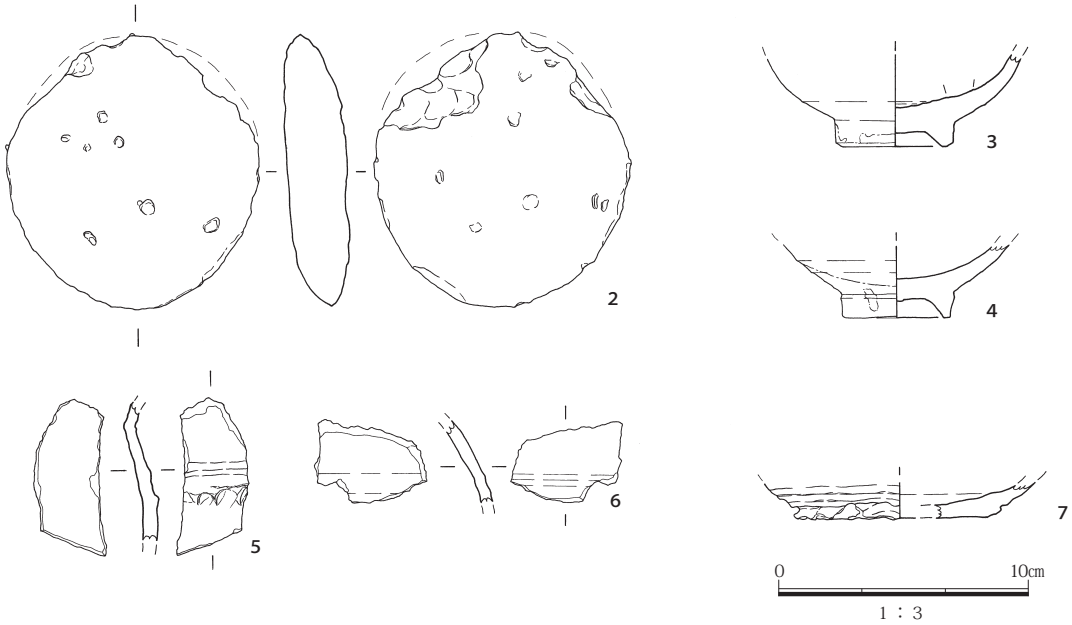
第６図　１号道路状遺構の出土遺物実測図





第７図　２号道路状遺構　平・断面図

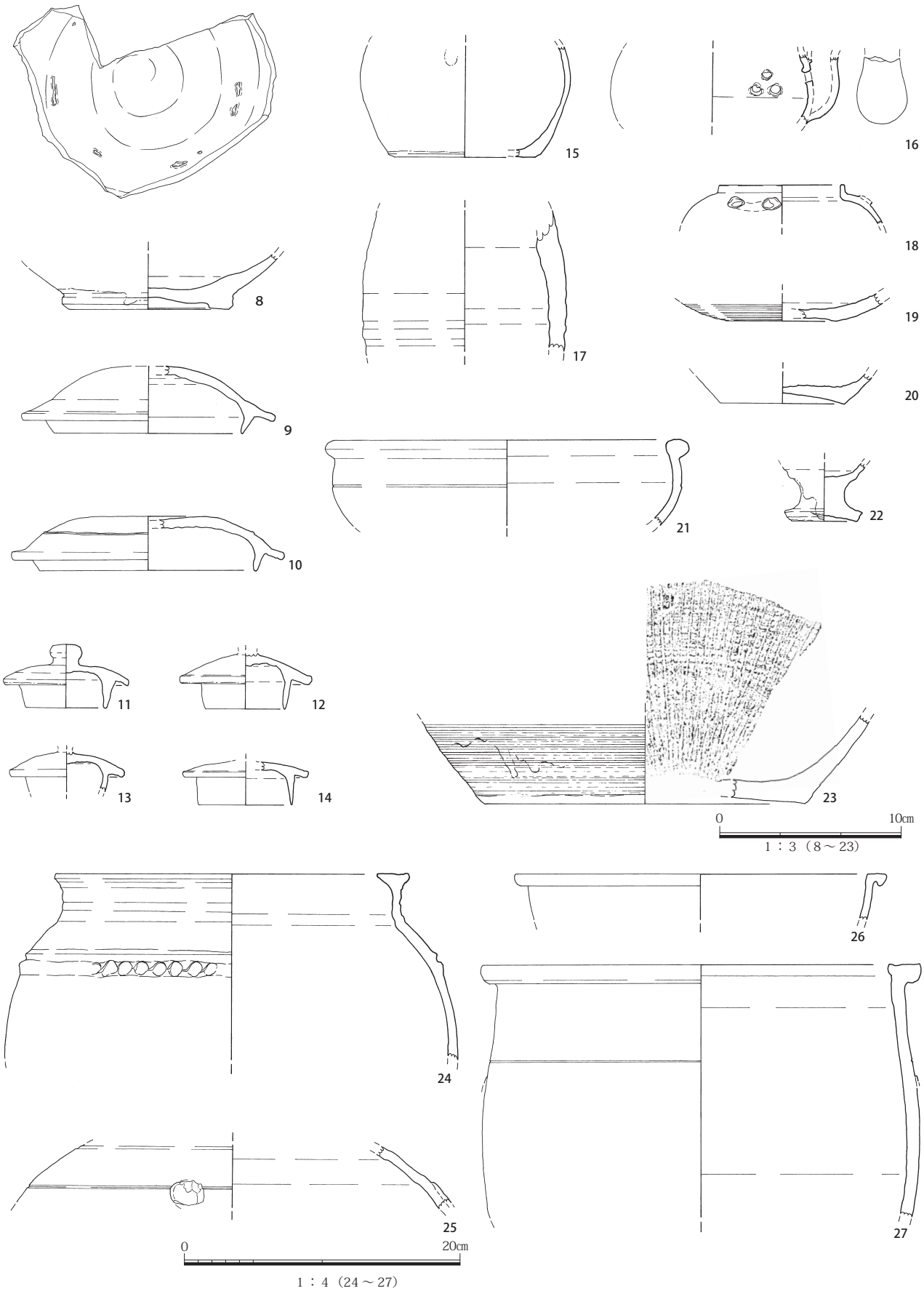
1　黒（7.5YR1.7/1）色、わずかにしまりあり、粘性なし。御池軽石多く含む。
2　黒（7.5YR1.7/1）色、わずかにしまりあり、粘性なし。御池軽石多く含む。
3　黒（7.5YR7/1）色、しまりあり、粘性なし。砂粒状の御池軽石を含む。
4　黒（10YR1.7/1）色、しまりあり、粘性なし。文明軽石を含む。
4'　黒（10YR1.7/1）色、しまりあり、粘性なし。
5　黒褐（10YR2/2）色、しまり・粘性ともになし。御池軽石を含む。
5'　黒褐（10YR2/2）色、しまり・粘性ともになし。
6　文明軽石層
7　黒褐（10YR2/2）色、しまり・粘性ともになし。
8　硬化土。御池軽石ブロックを主体とし、黒色土がわずかに含まれる。
上位ほど御池軽石が多い。赤化した硬化面が筋状に確認される。



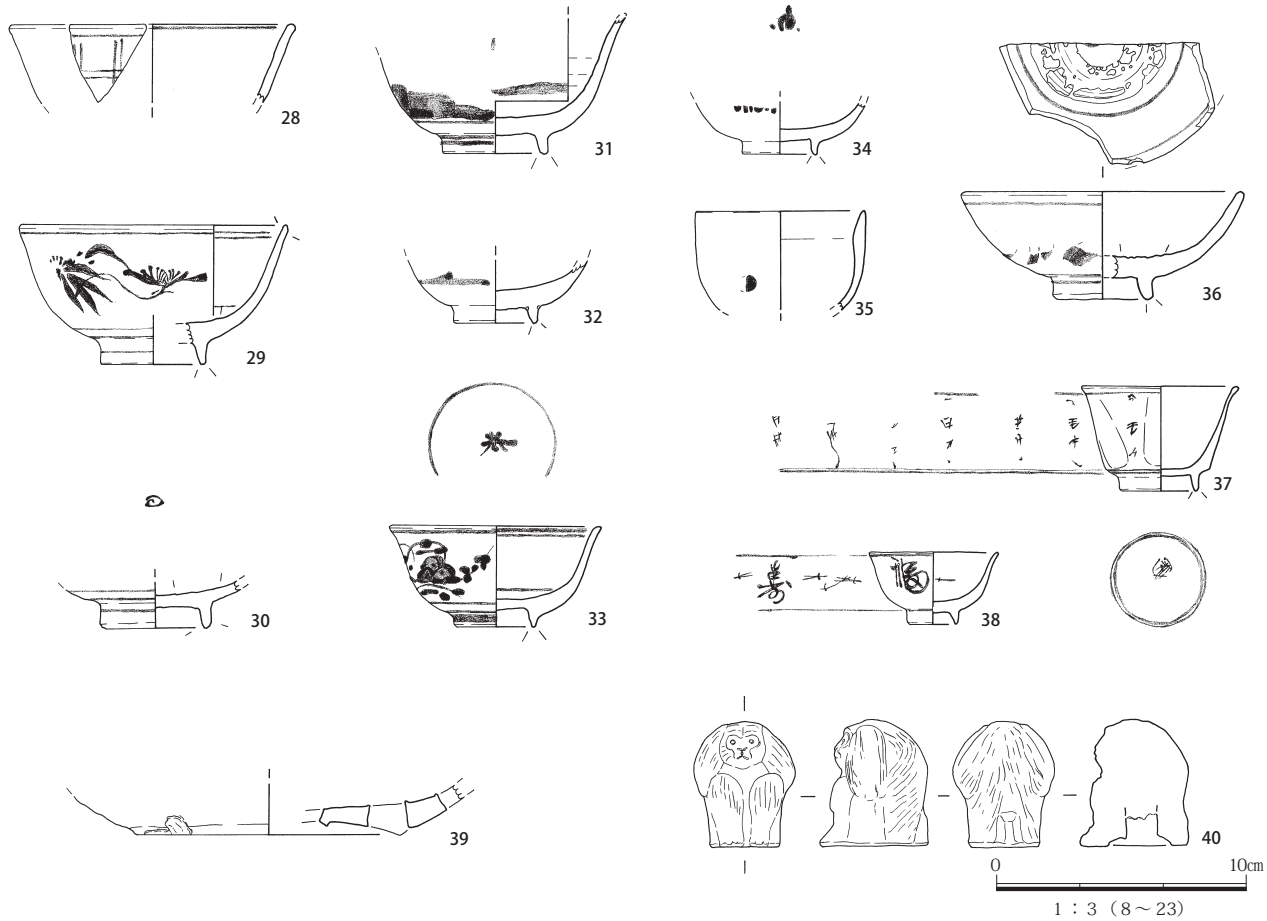
第８図　２号道路状遺構の出土遺物　実測図

面に煤がこびりついている。20 は徳利の底部である。23 は擂り鉢である。横方向のカキメののち、擂り目を施す。24、27 は甕であり、24 は均整のとれた縄絡文をもつ。口縁部には貝目跡などは認められない。26 は蘭鉢の口縁部である。なお、小片だがいわゆる白薩摩の土瓶片 42 も出土している（図版４－５）。25 は琉球の荒焼の把手をもつ甕の肩部である。18 は関西系の土瓶口縁部である。21 は瀬戸美濃系の鉢である。産地不明陶器として、17 の徳利と 22 の仏飯器がある。

28 ～ 30 は肥前系磁器である。28 は格子文、29 は唐草文を外面に施す。31、32 は薩摩系磁器で、にじんだような呉須が特徴である。34、35、38 は瀬戸美濃系磁器であり、34 は源氏香文をもつ。36、37 は産地不



第９図　東区整地層出土遺物実測図（１）



明磁器である。36 は内面に蛇の目釉はぎを施し、白色硬質の物質が融着している。胎土は青みを帯びる。39、40 は素焼きの土製品である。39 は焜炉目皿、40 は“聞か猿”をモチーフにした人形で、中空のつくりで、火を受けたのか大部分が黒化している。

３）その他

上記の遺構検出面で、調査区を北東－南西に走る溝状遺構の尾部を確認した（図版２－４）。遺構は北壁方向へ続くとみられ、単層の黒色埋土から、近世後半に位置づけられる 41 の磁器片が出土した（図版４－５）。

３　まとめ

第３節　自然科学分析

検出した道路状遺構は、どちらも遺構の廃絶後に文明軽石が降下していることから、少なくとも 1471 年以前に機能していた。出土遺物は近世から近・現代までの整地層中から得られたものが大部分を占める。近世後半の磁器を含んだ溝状遺構を検出していることから、調査区の外に遺物の供給元があると考えられる。

１　概要と目的

先述したとおり、検出した道路状遺構は時期を確定しうる遺物が皆無であり、手がかりとなるのは廃絶後に降下した文明軽石のみであった。そこで、時期判別の一指標とするため、遺構の埋土を対象に放射性炭素年代測定を実施することとした。

２　分析の対象と方法（表１）

分析には、１号道路状遺構の埋土を用いた。一つは上・下二つある硬化層の間の埋土（５層、No.1）、一つは最終段階の硬化面と、文明軽石層との間の埋土である（３層、No.2）

加速器質量分析法（AMS）によって得られた14Ｃ濃度について、同位体分別効果の補正を行った後に、放射性炭素（14Ｃ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。

３　分析の結果（表２）

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№.１の土壌では1260 ± 30年BP（２σの暦年代でAD 670 ～ 780，790 ～ 810，850 ～ 850年）、№.２の土壌では1220 ± 30年BP（AD 690 ～ 750，760 ～ 890年）の年代値が得られた。

各試料とも暦年代の年代幅が大きいが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。なお、土壌試料による年代測定結果は、その土壌が生成された当時の年代を示しており、文化層としての年代観とは必ずしも一致しない場合がある。分析の結果、３層と５層はともに、古代の範疇に収まるという結果が得られた（表２）。

表１　分析の試料と方法

試料名	採取箇所	種類	前処理・調整	測定法
№.１	１号道路状遺構，文明軽石下	土壌	酸洗浄	AMS
№.２	１号道路状遺構，硬化層間黒色土	土壌	酸洗浄	AMS

表１　分析の試料と方法

試料名	測定№.（Beta-）	未補正 ^{14}C 年代（年BP）	δ ^{13}C（‰）	^{14}C 年代（年BP）	暦年代（較正年代）（２σ:95％確率，１σ:68％確率）
№.１	315168	1240 ± 30	-23.7	1260 ± 30	交点：Cal AD 720, 740, 770 ２σ：Cal AD 670-780, 790-810, 850-850 １σ：Cal AD 690-780
№.２	315169	1190 ± 30	-23.2	1220 ± 30	交点：Cal AD 780 ２σ：Cal AD 690-750, 760-890 １σ：Cal AD 730-740, 770-830, 840-870

BP：Before Physics（Present），Cal：Calibrated，AD：紀元後

第Ⅳ章　総括

今回の調査では、中世以前に掘り込まれたとみられる道路状遺構を２条検出した。一つは波板状凹凸面を残し、並行する溝をもつ。もう一つは、断面Ｖ字状の深い溝状を呈していたものが、埋没が進むとともに硬化層が形成されていったとみられる。どちらもある程度の期間道として機能したと判断されるが、帰属時期は判然としない。廃絶後に降下した桜島文明軽石から、1471 年よりも前に使われなくなったことまでは言及できる。これらの道路状遺構が完全に埋没するのは、1 号道路状遺構は中世、2 号道路状遺構は近世になってからである。なお、遺構埋土を対象に行った自然科学分析からは、これらの道路状遺構が古代まで遡及するという結果が得られた。

調査で得られた出土遺物は、近世後半期から明治期にかけての陶磁器類が大部分を占め、わずかに中世から近世初頭のものが加わる。このことは、中世から近世まで、この地で絶えず戦乱が繰り返されていたことに起因するとも考えられよう。近世の段階では、遺物の量に対して検出したのは溝状遺構１条のみであり、付近に別の供給元がある可能性もある。陶磁器類は、薩摩や肥前系など九州のものをはじめ、琉球や関西系、瀬戸美濃系と、列島内の広範な地域のものが出土した。

道路状遺構の確実な廃絶時期は桜島文明軽石降下前であるが、発掘調査の成果や文書をひもとくと、この時までに志和池城や野々美谷城、有力氏族の居館とされる上大五郎遺跡が存在したとされる。陣ノ口遺跡もこれらと時期を同じくする可能性はあるものの、現段階ではまだ憶測の域を出ない。今後周辺の調査が進展するにしたがって、その帰属時期と当時の様相が明らかになるであろう。

【引用・参考文献】

志和池村史編纂委員会1957『志和池村史』（1975都城市立図書館復刊版）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003『雪山遺跡（日置郡東市来町）　猿引遺跡（日置郡東市来町）』南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ（伊集院IC～市来IC）　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53）

鹿児島県立埋蔵文化財センター2006『堂平窯跡（日置市東市来町）』南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ（伊集院～市来IC）　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念

東和幸2003「波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論」『縄文の森から』創刊号　鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要

東和幸2004「溝状遺構の一性格」『縄文の森から』第２号　鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要

都城市史編さん委員会2006『都城市史』都城市

都城市教育委員会1998『都城市の中世城館』都城市文化財調査報告書第45集

都城市教育委員会1989『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内北東部）』都城市文化財調査報告書第８集　都城市

宮崎県農政水産部農業振興課1980『都城・北諸県地域土地分類基本調査　都城』

渡辺芳郎2011「窯跡資料からわかることー近世薩摩焼の焼成技術ー」『やきものづくりの考古学』鹿児島大学総合研究博物館

本書の作成にあたって上記の文献を引用・参照したが、個々の部分に関する記述は割愛した。

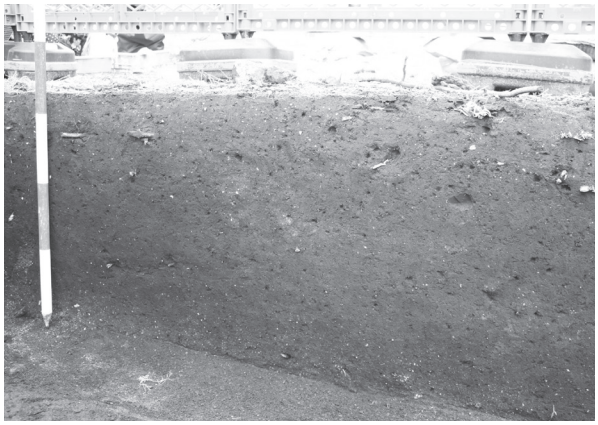
本文中の遺跡名とその位置については、（都城市教育委員会1989）を参照した。

表３　遺物観察表

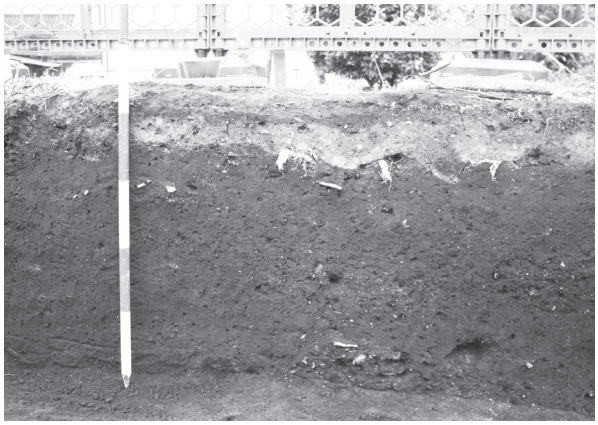
Ｎｏ.	出土遺構・地点	種類		大きさ（cm）	胎土、含有砂粒 調整	胎土調 釉調	備考
1	１号道路状遺構	土師質土器	皿	－	やや密。透明粒、褐色粒 回転ナデ	にぶい黄（2.5Y/6/3）	乱雑なナデ
2	２号道路状遺構	石器		長径 10.9 厚 2.4	－	－	凝灰岩製
3	２号道路状遺構	陶器	碗	底径 4.6	密。透明・白色・褐色粒 回転ナデ	にぶい褐（7.5YR/5/4）色 黒褐（10YR3/2）色	見込み蛇の目釉はぎ、薩摩焼（龍門司系）
4	２号道路状遺構	陶器	碗	底径 4.3	密。透明粒 回転ナデ	灰オリーブ（7.5Y5/3）色 外：灰オリーブ（7.5Y5/3）色　内：灰オリーブ（5Y6/2）色	無釉部もわずかに光沢を帯びる。高台内は兜布。唐津内山。
5	２号道路状遺構	陶器	甕	－	密。透明・白色・褐色粒 回転ナデ	にぶい赤褐（5YR5/4）色 褐灰（10YR4/1）色	幅の狭い絡縄文、薩摩焼（苗代川系）。
6	２号道路状遺構	陶器	甕	－	やや粗。石英、透明・白色・褐色粒 回転ナデ	赤褐（5YR4/6）色 オリーブ黒（7.5Y3/2）色	薩摩焼（苗代川系）
7	２号道路状遺構	土師質土器	皿	底径 8.4	密。雲母、透明粒 回転ナデ、底部イトキリ	にぶい黄橙（10YR7/4）色	幅の狭いナデ、表採
8	東区整地層	陶器	皿	底径 9.4	密。 回転ナデ	淡黄（2.5Y8/3）色 灰オリーブ（5Y6/2）色	見込みに胎土目跡、高台内に“二〇”の文字、初期伊万里
9	東区整地層	陶器	土瓶蓋	口径 10.3 高 3.7	やや密。石英、透明・白色粒 回転ナデ、回転ヘラケズリ	明赤褐（2.5YR5/6）色 明赤褐（5YR3/3）色	庇部付け根に重ね焼きの痕跡あり、薩摩焼（苗代川系）
10	東区整地層	陶器	土瓶蓋	口径 11.8 高 3.0	やや粗。石英、白色・褐色粒 回転ナデ、回転ヘラケズリ	にぶい赤褐（5YR4/3）色 黒褐（10YR2/3）色	重ね焼きの痕跡あり、薩摩焼（苗代川系）
11	東区整地層	陶器	土瓶蓋	口径 6.9 高 3.5	やや粗。透明・白色粒 回転ナデ、回転ヘラケズリ	灰褐（7.5YR4/2）色 黒褐（10YR2/2）色	内面にも施釉あり、薩摩焼（苗代川系）
12	東区整地層	陶器	土瓶蓋	口径 4.3	密。透明・白色粒 回転ナデ	褐（7.5YR4/3）色 黒褐（5YR2/2）色	薩摩焼（苗代川系）
13	東区整地層	陶器	土瓶蓋	庇径 7.2	やや粗。石英、透明・白色粒 回転ナデ	灰褐（7.5YR4/2）色 黒褐（10YR3/2）色	薩摩焼（苗代川系）
14	東区整地層	陶器	土瓶蓋	庇径 6.9	やや粗。透明・白色粒 回転ナデ	にぶい赤褐（5YR4/3）色 暗赤褐（5YR3/2）色	薩摩焼（苗代川系）
15	東区整地層	陶器	瓶	底径 7.6	密。透明・白色粒 回転ナデ、底部ヘラキリ	灰褐（7.5YR5/2）色 にぶい黄褐（10YR4/3）色	透明釉白流し、薩摩焼（龍門司系）
16	東区整地層	陶器	土瓶	胴径 11.4	やや粗。石英、白色粒 回転ナデ	－ 外：暗褐（7.5YR3/4）色　内：黒（5Y2/1）色	薩摩焼（苗代川系）
17	東区整地層	陶器	徳利	胴径 11.2	密、白色粒。 回転ナデ	外：灰褐（5YR4/2）色　内：にぶい赤褐（2.5YR4/3）色 －	荒焼
18	東区整地層	陶器	瓶	口径 6.9	密。 回転ナデ	灰白（2.5Y8/1）色 灰白（2.5Y8/1）色	把手あり、関西系
19	東区整地層	陶器	土瓶	底径 6.0	やや粗。石英、白色粒 カキメ、回転ナデ	にぶい赤褐（5YR5/4）色 極暗赤褐（5YR2/3）色（内面）	外面に煤付着、内面は狭い単位の回転ナデ、薩摩焼（苗代川系）
20	東区整地層	陶器	徳利	底径 6.7	やや粗。石英、透明・白色粒 回転ナデ、回転ヘラケズリ	褐（7.5YR4/6）色 内：褐（7.5YR4/3）色	上げ底、薩摩焼（苗代川系）
21	東区整地層	陶器	鉢	口径 20.0	やや粗。砂粒ほとんど含まず。 回転ナデ、底：回転ヘラケズリ	－ 浅黄（2.5Y7/4）色	胴部に沈線あり、瀬戸美濃系
22	東区整地層	陶器	仏飯器	底径 3.7	密。石英、白色粒 回転ナデ	褐（7.5YR4/3）色 淡黄（2.5Y8/3）色	透明釉白流し
23	東区整地層	陶器	擂鉢	底径 17.8	密。石英、白色粒 外：カキメ　底：ナデ	灰赤（2.5YR4/2）色 オリーブ黒（7.5Y3/2）色	ヨコスリののち擂目施す、薩摩焼（苗代川系）
24	東区整地層	陶器	甕	口径 25.7	やや粗。白色・褐色粒 回転ナデ、内面：カキメ	にぶい赤褐（5YR5/4）色 褐灰（10YR4/1）色	合わせ口で焼成、薩摩焼（苗代川系）
25	東区整地層	陶器	甕	肩径 29.8 （把手部）	密。砂粒ほとんど含まず。 回転ナデ	外：黄灰（2.5Y5/1）色、内：明赤褐（2.5YR5/6）色 －	荒焼
26	東区整地層	陶器	鉢	口径 27.0	密。白色粒 回転ナデ	褐灰（5YR5/1）色 外：暗赤褐（5YR3/3）色、内：暗オリーブ（7.5Y4/3）色	蘭鉢、薩摩焼（苗代川系）
27	東区整地層	陶器	甕	口径 32.0	やや粗。石英、白色・褐色粒 回転ナデ	褐灰（5YR5/1）色 オリーブ黒（7.5Y3/1）色	合わせ口で焼成、薩摩焼（苗代川系）
28	東区整地層	磁器	碗	口径 11.4	密 回転ナデ	－ 灰白（7.5Y7/1）色	外面に格子文、内面に一本線、肥前系
29	東区整地層	磁器	碗	口径 10.7	密 回転ナデ	灰白（N/8）色 灰白（10Y8/1）色	見込み蛇の目釉はぎ、外面に植物文、内面に重圏文、肥前系
30	東区整地層	磁器	碗	底径 4.4	密 回転ナデ	灰白（N8/）色 灰白（10Y8/1）色	見込みに手書き文様、蛇の目釉はぎ、外面に重圏文、肥前系
31	東区整地層	磁器	碗	底径 4.2	密 回転ナデ	灰白（7.5Y8/1）色 灰白（5GY8/1）色	にじんだ呉須、薩摩系の端反り碗
32	東区整地層	磁器	碗	底径 3.4	密 回転ナデ	灰白（7.5Y8/1）色 灰白（2.5GY8/1）色	
33	東区整地層	磁器	碗	口径 8.5	密 回転ナデ	白色 灰白（5GY8/1）色	外面に崩れた菊花唐草文、見込みに手書き文様、瀬戸美濃系
34	東区整地層	磁器	碗	底径 3.0	密 回転ナデ	灰白（N/8）色 灰白（10Y8/1）色	外面に源氏香文、内面に手書き文様あり、瀬戸美濃系
35	東区整地層	磁器	碗	口径 6.8	密 回転ナデ	灰白（7.5Y8/1）色 灰白（7.5Y8/1）色	外面に円形文様あり、瀬戸美濃系
36	東区整地層	磁器	碗	口径 11.3	密 回転ナデ	灰白（N8/）色 明オリーブ灰（5GY7/1）色	見込みに蛇の目釉はぎ、ガラス質の融着あり、外面に文様あり
37	東区整地層	磁器	猪口	口径 6.2	密 回転ナデ	灰白（5Y8/1）色 灰白（7.5Y8/1）色	外面に不均等な面取り、７ヶ所に崩れた文字を配置。高台内にも手書き文様あり
38	東区整地層	磁器	猪口	口径 5.1	密 回転ナデ	灰白（N8）色 灰白（10Y8/1）色	外面に寿、福の文字を配する
39	東区整地層	土製品	焜炉目皿	底径 10.5	やや粗。透明・白色・雲母を含む。 回転ナデ	橙（7.5YR6/6）色 －	素焼き、硬質。二次焼成の煤が付着
40	東区整地層	土製品	人形	高 5.0 幅 4.0	密、透明粒。 型とりによる製作？	淡黄（2.5Y8/3）色	素焼きの“聞か猿”、大部分が黒化し、ただれたような箇所も。火を受けた可能性あり

△　陣ノ口遺跡空中写真（写真上が北）　▲

▲　東区　△　西区

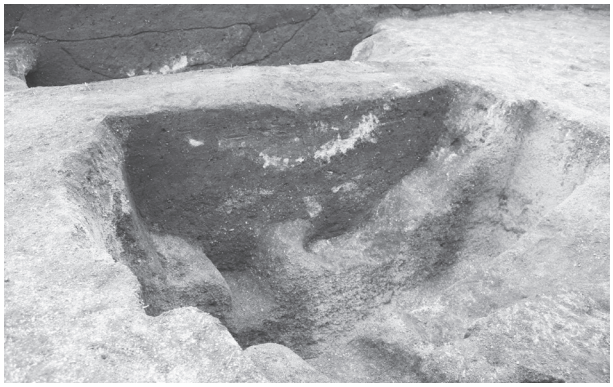


土層堆積状況１（東区、北より）

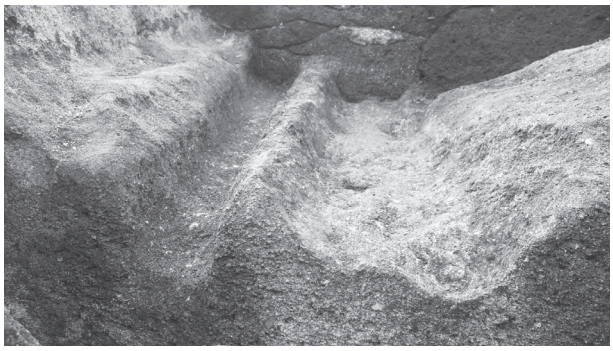


土層堆積状況２（東区、北より）

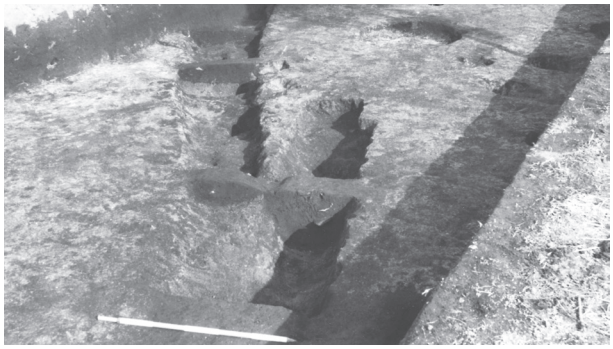
1．1号道路状遺構　上部硬化面と下部硬化面（南より）



2．1号道路状遺構　断ち割り状況（北東より）

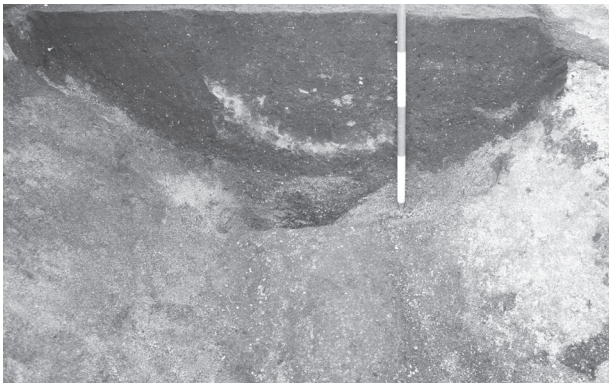


3．1号道路状遺構と溝状遺構（北より）



4．近世後期以降の溝状遺構（左側、南西より）

5．2号道路状遺構　最硬化面（東より）

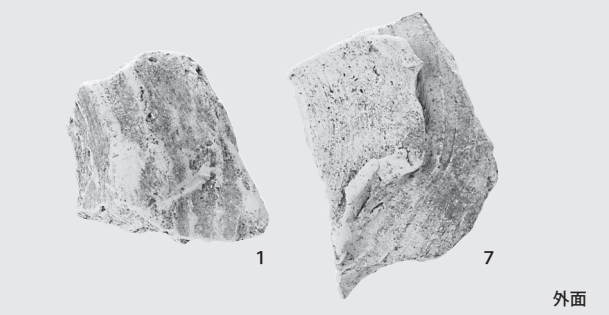


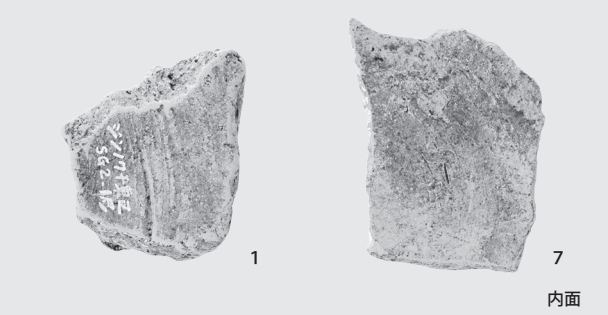
6．2号道路状遺構　硬化面近景（南より）

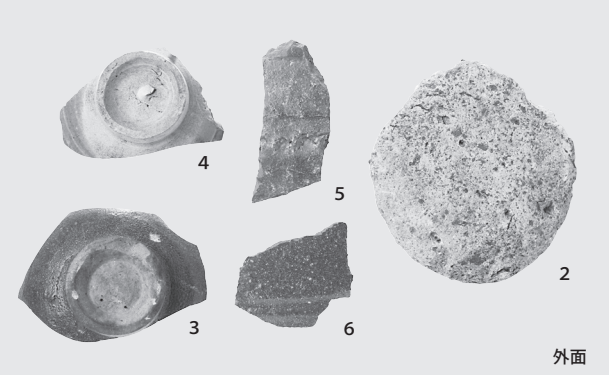
7．2号道路状遺構　完掘状況（東より）

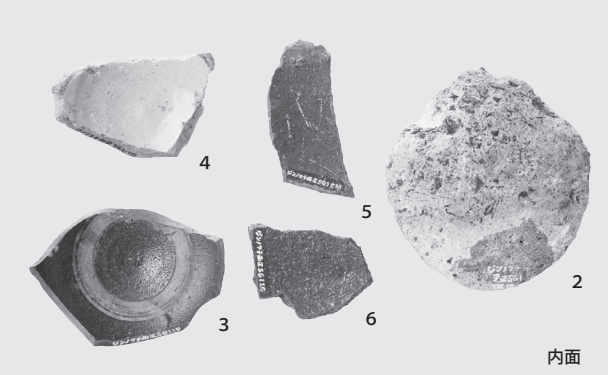
〔図版3〕

道路状遺構に伴う遺物

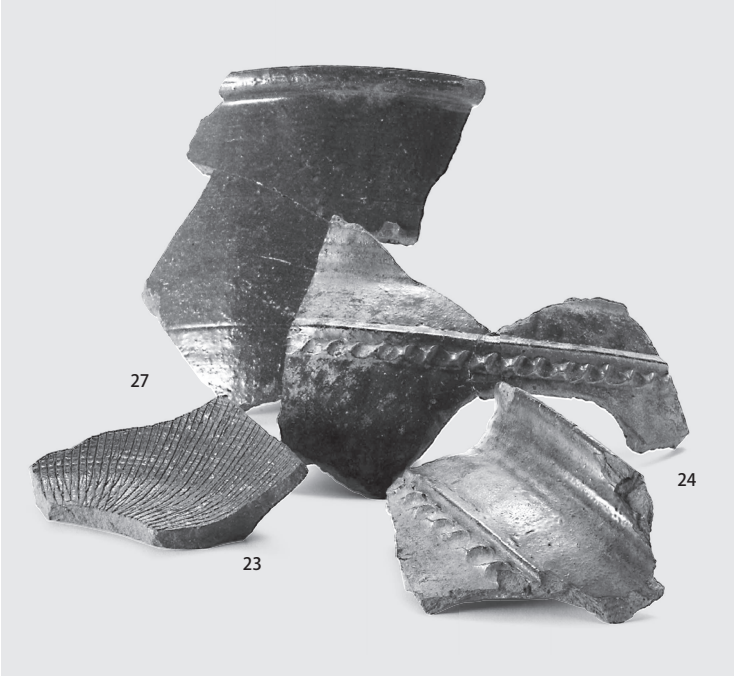


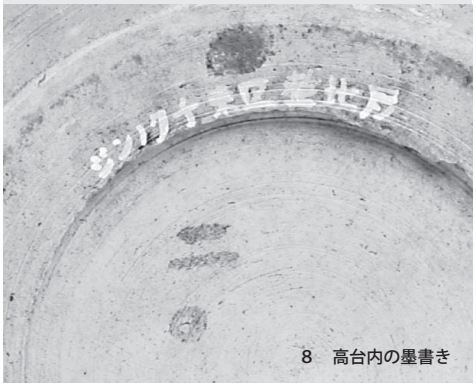






近世～明治期の整地層から出土した遺物1

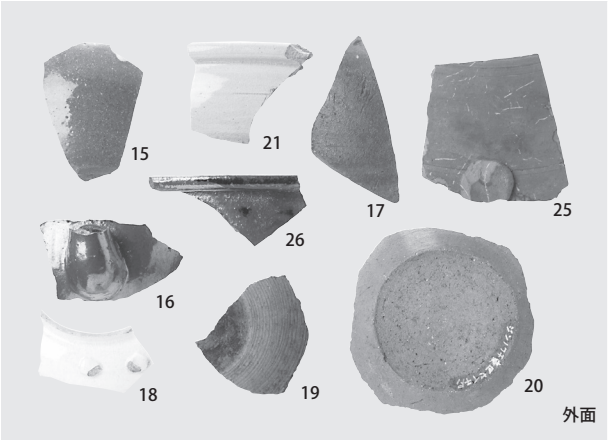


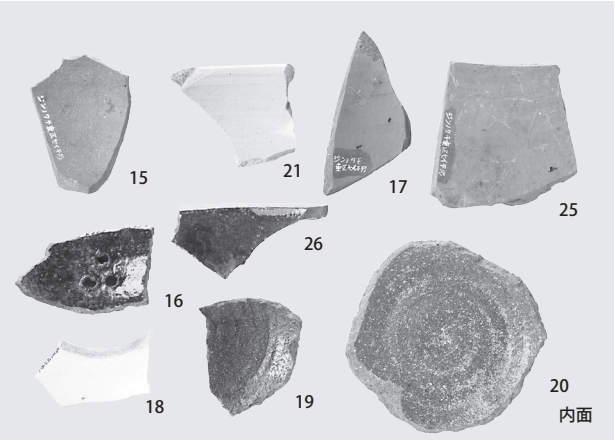


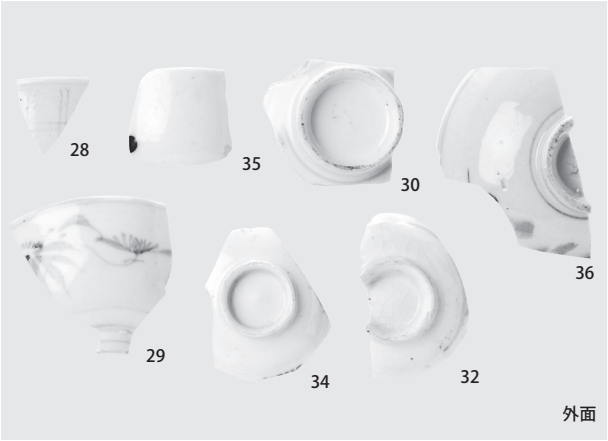
8　高台内の墨書き

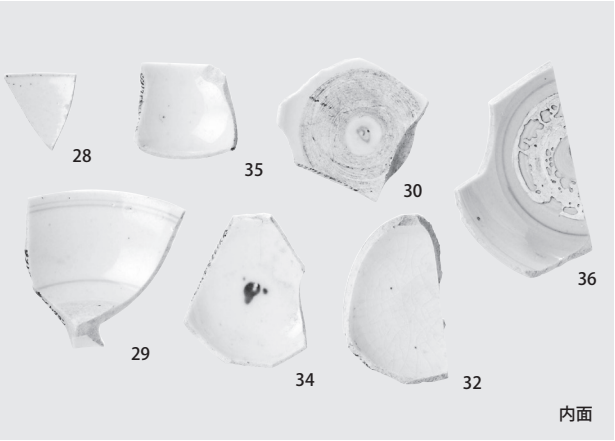
〔図版4〕

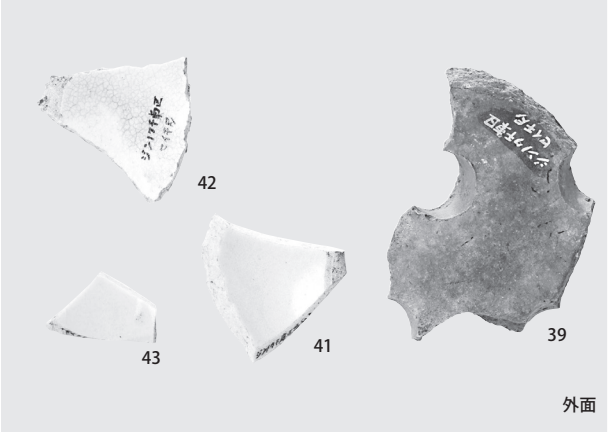
近世〜明治期の整地層から出土した遺物2

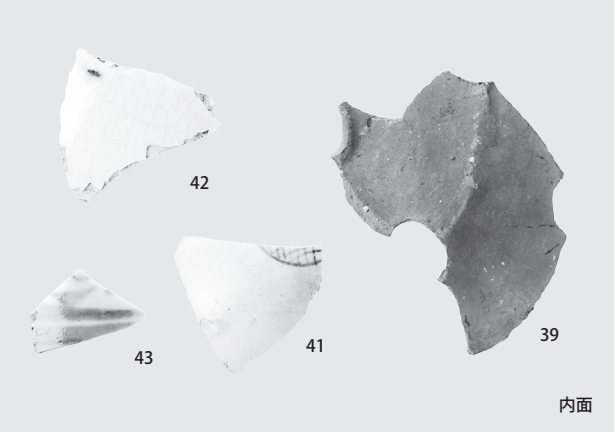












報　告　書　抄　録

ふりがな	じんのくちいせき
書名	陣ノ口遺跡
副書名	県道高城山田線（志和池工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第２２２集
編著者名	宗廣睦子、日高広人
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地　TEL 0985-36-1171
発行年月日	**2012年10月28日**

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
陣ノ口遺跡（じんのくちいせき）	宮崎県都城市（みやざきけんみやこのじょうし） 上水流町（かみずるちょう） 1017-3 ほか	45202	10023	31 度 48 分 35 秒 付近	131 度 08 分 04 秒 付近	2011.11.16 ～ 2011.12.26	約 280㎡	県道高城山田線（志和池工区）道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
陣ノ口遺跡（じんのくちいせき）	集落	中世以前	道路状遺構２条	土師質土器、陶磁器、石器	

要約	今回の調査では、桜島の文明軽石降下より前に廃絶した道路状遺構を２条検出した。志和池城や野々美谷城と時期を同じくする可能性はあるが、いつの時代に道路として機能したのかについては、周辺の調査が進展するにつれて明らかになるであろう。なお、調査で出土した遺物は、大部分が近世～近現代にかけての整地層から出土したものである。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第２２２集
都城市所在
陣ノ口遺跡
県道高城山田線（志和池工区）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
２０１２年１０月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎郡佐土原町大字下那珂 4019 番地
TEL 0985(36)1171　　FAX 0985 (72)0660
印　刷　有限会社　いろは企画
〒889-1603　宮崎市清武町正手３丁目１９－２
TEL 0985(85)5889　　FAX 0985 (85)5889